みちのく松陰道 1

嘉永4年(1851)12月江戸長州藩邸を出奔した吉田松陰は、熊本藩宮部鼎三とともに東北歴遊の旅につきました。翌嘉永5年(1852)3月4日中里を発った松陰らは、今泉・相内・十三を経て、小泊に宿泊。翌5日小泊砲台を経て、傾り石より弘前藩によって通行が禁じられていた算用師峠を越えて三厩に到着しました。松陰の通行を記念した「みちのく松陰道」は、昭和54年(1979)整備されました。

七ツ石崎台場跡 2

文化５年(1807)外国船に対する海岸防禦のため、弘前藩が大筒ならびに狼煙台を設置しました。

小説「津軽」の像記念館 3

小説「津軽」の像に隣接して、平成8年(1996)開館。「タケと太宰の出会いと生涯」「小説「津軽」の誕生／小説「津軽」のたどった足跡」「タケと太宰の再会」などのテーマから構成され、小説「津軽」関連資料や越野タケ遺品などを展示、小説「津軽」の世界が追体験できるようになっています。 ●開館時間　4月～10月…9:00～16:30／11月～3月…9:00～16:00　●休館日　月曜日(10月～3月は月・火曜)年末年始(12月28日～1月4日)　●観覧料　一般200円、高・大学生100円、小・中学生50円　TEL. 0173-64-3588

■小説「津軽」の像／太宰治文学碑(再会公園)

太宰治の小説『津軽』のクライマックス、太宰と「たけ」の再会の様子を、等身大のブロンズ像と文章で再現したもので、平成元年(1989)運動場を見下ろす高台(再会公園)に設置されました。ブロンズ像は、彫刻家田村進制作、無言で運動会を見守る「たけ」は和服の正座姿、傍らの太宰は国民服にゲートル・軍靴を着用し、脚を投げ出した格好で復元されています。また、『津軽』の一節が刻まれた太宰治文学碑は、太宰の長女・津島園子筆によるものです。

小泊山春洞寺 4

曹洞宗寺院。本尊釈迦如来。元和3年(1617)勝岳院(弘前)3世春洞が春洞庵として開創、明治時代寺号を公称と伝えられます。かつては円山付近に所在しましたが、昭和30年(1955)現在地に移転しました。

無縁山海満寺 5

浄土宗寺院。本尊阿弥陀如来像。万治元年(1658)良無玄道、あるいは源道が開山と伝えられます。当初は伝寺屋敷跡に所在したとされますが、山津波により小泊村内に移転。その後もたびたび焼失しましたが、その都度再建、現在の本堂は昭和57年(1982)新築されました。

■小泊海満寺観音堂

津軽三十三観音18番札所。寛永10年(1634)建立。当初は現神明宮境内にあり、飛龍大権現分社として飛龍宮と称されていましたが、明治初年神仏分離令によって神明宮を分離、観音堂は現在地に移転しました。文政年間小泊沖から引き揚げられた聖観音像を祀っています。
御詠歌:「見渡せば御法も深き海満寺　鐘の響に浮ぶ海士人」

■菩薩坐像(伝聖観音像)

木造菩薩坐像。文政年間小泊沖から引き揚げられと伝えられます。腰から下・両腕が失われた体幹部のみの姿ですが、造形の特徴から室町以前の造仏と推定されています。

思柳山西願寺 6

真宗大谷派寺院。本尊阿弥陀如来。寛永8年(1631)越後出身の演空開創、当初は鮫貝に所在しましたが、宝永8年(1711)頃現在地に移転と伝えられます。蝦夷錦打敷・青玉・蓑虫山人画など数多くの指定文化財を所蔵します。

法広山正行寺 7

日蓮宗寺院。本尊十界曼荼羅。元々飯詰村に所在しましたが、寛永13年(1636)小泊村に移転、その後宝永3年(1706)智養院日了が再興と伝えられます。

湊番所跡／遠見番所跡 8

寛文4年(1664)設置。湊に出入りする船舶・人・物資を管理する湊目付(沖横目)が常駐しました。遠見番所は稲荷山山頂に置かれ、海上を見張る番人が常駐しました。

円空作木造男神像［県重宝］ 9

東北地方で唯一の円空作神像。上半身を衣で覆い、下半身が台座と一体化した作風で、円空が津軽半島を訪れた寛文年間(1661～73)の造像と考えられています。

神明宮 10

中世安藤氏の砦「柴崎城跡」、小泊集落西端の丘陵に位置する神社。祭神天照大神。明治初年神仏分離令によって飛龍宮(現在の尾崎神社)から独立しました。

柴崎城跡 11

神明宮一帯を中心とする中世城館。水平線上に北海道を望む、安藤氏最後の砦。拠点十三湊を南部氏に攻められた安藤氏は、北海道への退散を余儀なくされます。

松前藩の事績を記した『新羅之記録』には「嘉吉二年秋攻破十三之湊而乗取津軽、盛季没落而雖左右舘、籠以為無勢不克防戦、被追出去小泊之柴舘」「亦其以後嘉吉三年冬、下国安藤太盛季落小泊之柴舘渡海之後」とあり、嘉吉2年(1442)秋に十三湊を攻略された安藤氏が小泊の柴舘に撤退、さらに翌年冬には北海道へ落ち延びたとしています。この「柴舘」が柴崎城跡に相当すると考えられています。

大潤海岸／舫岩 12

中世安藤氏の時代から近世にかけて、碇泊地として利用された天然の良港。北前船(弁財船)を繋留したと伝えられる「舫岩」や、海蝕洞「岩門」などがあります。岩門をくぐって急坂を登ったところが、安藤氏最後の砦「柴崎城跡」になります。

弁天島遺跡 13

権現崎から日本海に突き出す陸繋島。天和2年(1682)建立の弁天宮には、海上安全と大漁の神として弁財天が祀られています。発掘調査により、15世紀前半頃の陶磁器や茶臼などが出土しました。背後に安藤氏最後の砦、柴崎城跡を擁することから、安藤氏と関連する宗教施設が存在した可能性があります。

権現崎 14　尾崎神社 15　徐福の里公園 16

日本海に突き出した権現崎は、北前航路の目印であるとともに、船乗りたちの信仰の対象になっていました。権現崎山頂の尾崎神社には、祭神伸邪那岐命・伊邪那美命のほか、「航海の神」として徐福像が祀られています。秦の始皇帝の命を受けた徐福が、不老不死の仙薬を求めて渡来したとする伝承は日本各地に残されていますが、権現崎は最北の伝承地となります。

近年、下前地区には高さ3mの徐福石像を中心とする「徐福の里公園」が整備されました。

「太宰とタケ再会の道」文学碑 17 18 19 20 21 22

平成11年(1999)・翌12年(2000)小説『津軽』ゆかりの地に6基建立されました。碑文には小説『津軽』の一節とともに、方向案内が刻まれており、太宰治と越野タケ(小説中では「たけ」)が再開するまでの足取りをたどることができます。